NIE実践報告

1．タイトル：**わたしたちのすがた**

2．学校名

熊本県尚絅高等学校

3．実践者名（代表者名）

増井洋介

4．学年

第2学年（平成19年度当時）

5．教科・領域名および受講児童・生徒数

特活・ホームルーム　29人（女子）

6．単元（本時の学習課題）名

新聞記事を通じての他者理解・自己理解

7．目標（狙い）

①生徒たちが新聞を身近に感じるようになること。②新聞記事を通じ、同世代の若者の姿や考えにふれさせること。③同じ記事への級友の感想を読ませ、考えの多様さにふれさせたり共感を持たせること。

8．評価の視点

①クラス単位の特別活動なので、点数化する評価はしない。 ②生徒が書いた感想（匿名）をいくつか活字にした。感想を選ぶ際には本音で書かれていると思われるものを、内容に偏りがないように選んだ。

9．年間指導計画における本単元の位置づけと時数

（または、単元展開および時数と本時の位置づけ）

この活動は年度前半の「特別活動」（隔週土曜日）に計4回実施した。この活動に続き「〈新聞〉使って授業を作ろう！」というタイトルで、生徒のグループによる授業を行った。

10．単元（本時）の学習展開（含む時数）と留意点

①生徒たちに、新聞に関するアンケート調査を行った。主に問うたことは新聞に対する意識と、生徒の生活に新聞が占める位置である。（第1回の約15分）
（留意点）家庭の経済的事情などから新聞を購読していない世帯の生徒も増えてきた。アンケートを実施するにあたっては、この点に配慮して言葉かけを行った。
②生徒に身近な新聞記事、例えば高校生を含む若者に関する記事を1回の実践あたり2つ、異なる新聞から抜粋し、それを読んだ感想を所定の用紙に書かせた。（第1回の残り30分と第2回以降）
（留意点）記事を選ぶにあたっては、内容に偏りが生じないよう配慮した。
③生徒が書いた感想の中から、1記事あたり5~　6をピックアップ、ワープロで打って印刷し生徒たちに配布した。（配布は次の回の導入時に、コメントしながら約10分）
（留意点）印刷した文章を誰が書いたか分からないよう、生徒相互に書き手を尋ねないよう言葉かけをした。

11．児童・生徒の反応、感想・意見

生徒たちは集中して新聞記事を読み、感想を書いていた。記事の内容もよく読解できていた。生徒たちの感想の中には一般論・世間語的なものもあったが、率直に語られているものが多かった。生徒たちの感想を印刷・配布したプリントについては、食い入るように読んでいる生徒が多くいた。

12．成果と課題

目標に照らして、一定の成果はあげたものと思われる。本校生の現状を見ていると、級友との関係に過敏な生徒が多いと感じる。そこで、生徒たちの間に共感を造成し、教室の風通しを良くすることに新聞を使えないかと考えた実践である。同一の記事についての自分とは異なる意見を読み、人には様々な考え方があることが分かったのではないか。この実践では「まとめあげる段階」まで至らなかったので、次回、近い実践をするときにはその点に留意したい。例えば、生徒たちの（この実践に対する）感想を共有することも可能だったか。
その意味でも実践内容を途中で変更せず、一つの取り組みを腰を据えて行った方が良かったかもしれない。